大野城市歴史資料展示室　解説シート　考古No.59

人面墨書土器

大野城市教育委員会

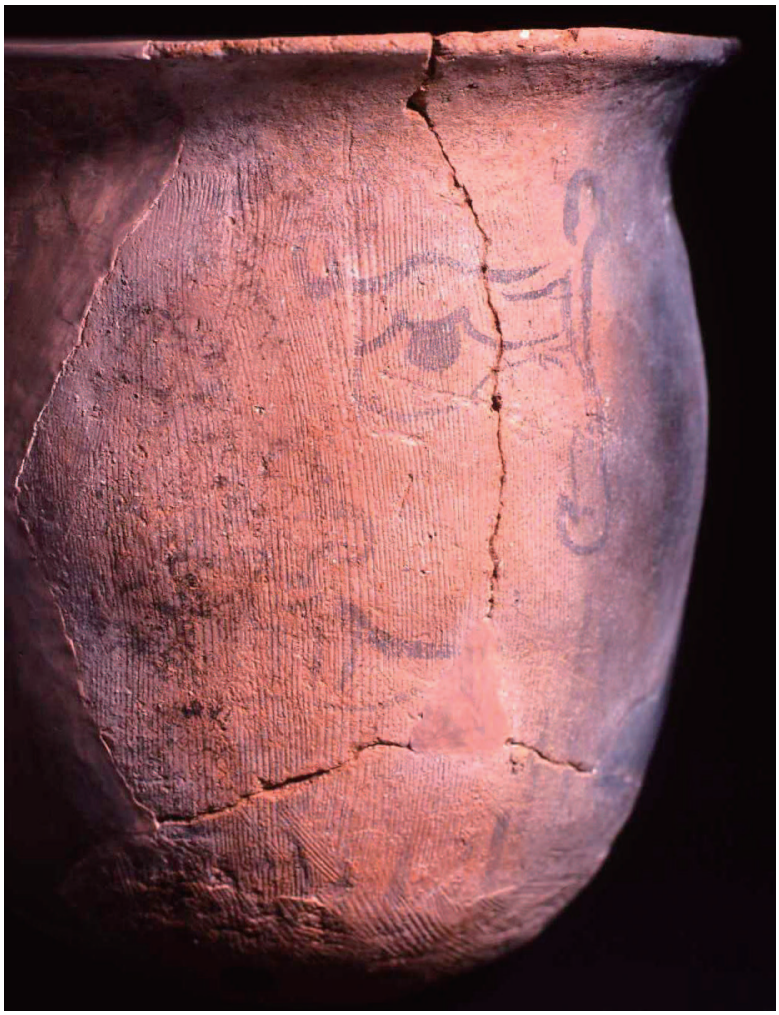

写真１　人面墨書土器

大野城市仲畑２丁目に広がる仲島遺跡では、昭和54年と57年に人の顔が描かれた土器が３点出土しました。これらは人面墨書土器とよばれ、古代の祭祀に使われていた特殊な土器です。土師器（はじき）と呼ばれるこの土器はいずれも奈良時代に作られたもので、ひとつは髭を生やしたこわもての男性が（写真１）、のこり二つは団子鼻でたれ目の顔が描かれています（写真２・３）。

今でも冬になると毎年のようにインフルエンザが流行していますが、人面墨書土器が作られた当時は天然痘をはじめ命にかかわる疫病（えきびょう）がいくつもありました。人々は疫病が自分たちの行った罪や体に溜まったけがれによってもたらされたものと考え、それらを祓（はら）うことで病気を治そうとしました。人面墨書土器を使った祭祀の方法には諸説ありますが、土器の口に紙を貼り、病気の人が息を吹き込むことで罪やけがれを土器に閉じ込めたといわれています（写真４）。そしてその土器を水に流すことで、「悪いもの」も一緒に流していたと考えられています。

また、人面墨書土器に描かれた顔は人間の顔ではなく疫神（えきしん）を表しているともいわれています。顔は土器の表裏２面に描かれるものが多いほか、４面・８面などもっと数の多いものもあります。怒ったような顔のものが多いのですが、笑った顔もあり表情は様々です。

さて、仲島遺跡で出土した人面墨書土器をみてみましょう。写真１は甕形土器で、口縁部の直径が約25cm、高さが約27cmある大きなものです。写真２・３は鉢形土器で、二つの鉢の片側にはもともと把手がついていました。鉢は両方とも口縁部の直径が10cm程度、高さが７cm程の両手に収まる小さなものです。いずれの土器も焼いた後、底の部分に穴が開けられており、うつわとして使うことはできません。

人面墨書土器を使った祭祀は平城京ではじまったとされ、地方でも官衙など国の施設に近い遺跡から多く出土しています。九州ではそれほど出土例はありませんが、福岡県内では仲島遺跡のほか、福岡市や春日市といった比較的大宰府に近い地域から多く出土しています。

人面墨書土器が出土する場所は川や井戸などの水辺が多く、仲島遺跡でも２つの鉢は御笠川の氾濫原から出土しています（写真５）。近くで祭祀が行われ、土器が流れ着いたのでしょう。

平成25年３月

写真３

写真４

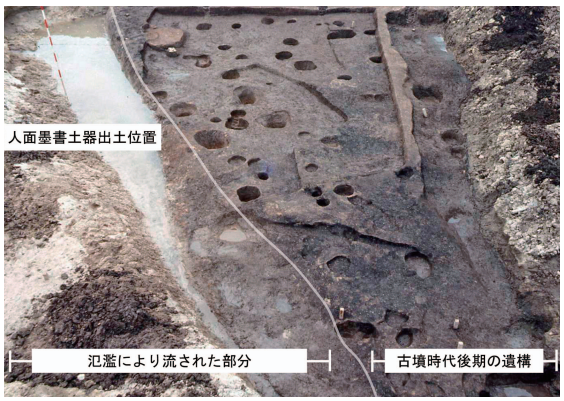

写真５　人面墨書土器出土位置（ポールの部分）

参考・引用文献
・巽淳一郎　1996『日本の美術361　まじないの世界Ⅱ（歴史時代）』至文堂
・平川　南2000「古代人の死と墨書土器」『墨書土器の研究』